日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンション401号
Tel：03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752

夏祭り in いたばし花火大会

安部 花子

8月3日、いたばし花火大会に参加しました安部と申します。今回は総勢約60名のロシア大使館関係者の皆さんと、1万5000発の打ち上げを誇る東京最大の花火大会である「いたばし花火大会」を心ゆくまで堪能しました。

実は花火大会の存在を知ったのは前日の朝。モスクワへの留学試験に受かった友人から渡露前の最後に一緒に参加しようと誘われたのがきっかけでした。人混みの凄まじさに恐れをなし、浅草橋に住んでいた時ですら隅田川の花火大会をテレビ中継でしか見ない派の私にとっては一大決心でしたが、友人に会う最後のチャンスを逃すまいといざ板橋区へ向かいます。

当日、待ち合わせ場所の蓮根駅に向かう途中、電車は満員状態。車両から吐き出され改札へ向かうと、既に50名以上のロシア大使館関係者の皆様が大勢お揃いで、千葉副会長の姿を見つけホッと一安心。いざ会場へ向かいます。道中、過去の浴衣着付け教室や料理教室でご一緒したロシア人参加者の方とも再開を果たし、親しい顔ぶれで花火を見られることを嬉しく思いました。

突然の雷雨に惨憺たる混乱ぶりとなった足立の花火大会をニュースで見たのがついこの間のこと、とにかくすし詰めでも、蒸し風呂でも、花火を現地で楽しむためには必要な代償だ…！と覚悟して現地に向かうと、なんとそこには広々としたぴかぴかのブルーシートが！頭上にはさえぎる物のないまん丸の夜空が広がり、まるでテレビで見るような抜けの良い景色が広がっています。下は芝生で、念のためにもってきたクッションなど不要なほど、ふかふかの特等席。日向寺専務理事がご厚意から、早朝に設営をして下さり、日中の炎天下のさなかも場所をキープし続け、この素晴らしい特等席をしつらえてくださいました。巨大クーラーボックスも完備され、ちょっとした青空バーの様相。他の有名な花火大会でどんなに高額で予約の取れない特等席を押さえても、ここに勝るものはないと思います。

屋台もまばらに出ていましたが、私たちのブルーシートでの花火のお供は、日本らしいお祭りフードに加えてロシア人参加者の方がプレゼントに持ってきてくださった、ウォッカ、ゼフィール、そして私の大好きなロシア名物アリョンカ・チョコレート。この蒸し暑さの中でも美味しい状態で食べられるよう、ロシア人参加者の方が保冷剤とともに一生懸命持ってきてくださった差し入れの味は格別。美味しい楽しい花火大会をみんなで味わいます。大きな花火が上がるたびに、ロシア人からも日本人からも歓声が上がります。あまりの素晴らしい巨大花火の連続技に、ずっと見上げている首が痛くなってしまい顔を見合わせて笑ってしまう場面もありました。私の周りの席はロシア語での会話が多くあまり分からなかったのですが、言葉が通じなくても、一緒に美しいものをみて感動し笑いあうことができ、とても楽しかったです。今回のような素晴らしい回を企画してくださった運営の皆様、これ以上ない場所づくりをしてくださった日向寺常任理事様、本当にお疲れ様でした。心より感謝申し上げます。

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集中！

月曜中級（18：00～19：00）
水曜初級前半（20：10～21：10）、他プライベートクラス
土曜上級（9：00～10：30）、土曜午後：上級時事
＊会員の方のためのクラスです。受講の際はご入会いただきますのでご了承ください。レベル別、プライベート、オンラインなどご希望に合わせて、担当よりご案内いたします。
見学も一回のみ可能です。**変更の場合もあります**ので、事前にお問い合わせください。

●ロシア語の泉（12）

日時：11月10日、12月1日、12月15日（日）13：30～16：00
会場：事務局またはオンライン
参加費：会員7000円、一般8500円
講師：スニトコ・タチヤナ先生

●講演会

日時：2024年12月14日（土）13：30～15：30（予定）
講師：青島顕氏（毎日新聞社）

●ロシア料理講習会

日時：2024年12月8日（日）9：00～12：00
お申込み、問合せ：NPO日ロ交流協会事務所
E-Mail：nichiro@nichiro.org Fax:03-5563-0752

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。
振込先:郵便口座00160-9-66486、加入者名：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752 ＊なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願い致します。

第37回「麻布区民センターふれあいまつり」に参加

「ロシア民謡を楽しむ会」

平成７年（1995年）に当協会の文化交流活動として、わずか数名で創設された「ロシアの歌と踊りの会」は、その後大使館付属のロシア人学校の先生を指導者に迎え数年間活動致しました。その後2001年に「ロシア民謡を楽しむ会」と名称を変えて今日まで活動を続けています。今年は10月19日（土）第37回「麻布区民センターふれあいまつり」に5年ぶりの出演をさせて頂きました。ミハイル・カンディンスキー先生のご指導のもとで春からレッスンを積み重ね、今回は先生自ら伴奏して頂き、「黒い瞳」「君知りて」「バイカル湖のほとり」「モスクワ郊外の夕べ」の4曲を男声、女声、混声合唱で歌い観客の方々から温かい拍手を頂きました。

我が会はこの「ふれあいまつり」では参加団体として2番目に古い団体で、今年は26回目の出演となりセンターのほうからも、「無くてはならない出演団体です」と期待されております。

来年は創設30周年を迎えます。今年は3名の入会者を迎えましたが、充実した合唱団とするためにも会員を増やしたいと考えております。男女会員を募集中です。日ロ交流協会の更なる支援をお願いする次第です。　（代表・田中徹）

「ロシアンカ」

10月20日（日）、ロシア大使館付属学校の生徒たちによるアンサンブルである「ロシアンカ」が昨年に続き、港区の「第37回麻布区民センターふれあいまつり」に出演いたしました。出演したのは、生徒34名とピアノのオリガ・カローシナ先生。私は皆さんを大使館から会場まで引率するとともに開演前に舞台挨拶をさせていただきました。本年もプログラムを事前に配付したこともあり、たくさんの親御さんが同行してくださったほか、会場では麻布警察の署員2名が見守ってくださっていたので、安心して参加することができました。また、今回は昨年から曲目を一部入れ替えし、新しいメドレーをお届けしたこともあり、客席からは温かい声援と拍手をいただくことができました。

なお、来年の出演については、生徒たちや先生の意向、運営側の要請等を考慮して決めていきたいと思います。

（副会長・岡崎好典）

カザフスタン旅行記・②

チャリンキャニオンを臨む

チェ・ジェームズ

カザフスタン旅行の二日目。朝食はビュフェ式。今まで旅行してきた国のホテルの料理は大体パンや卵、ベーコンなど定番のものが多いので、あまり期待せずに食堂に入ったが、陳列された食べ物の豊富さに驚いた。見たことのない果物やナッツなど目新しいものばかりが置かれていて、つい携帯の翻訳アプリを開いて端から端まで調べてみていた。しかし調べてもよく分からないものが多い。紫色のジュースにКаркаде компотыと書いている飲み物があり、調べたらフヨウのコンポートというジュースらしい。もちろんすべて分からないものばかりではなく、ロシア文化圏で食卓に欠かせない黒パンやブリヌイ、またロシアンティーも。美味しそうなものを次から次にお皿に運ぶうちに、小さなリンゴが入った籠が視界に入った。実はアルマトイ（Алматы）の語源はカザフ語の“リンゴ=アルマ（алма）”から来ていてリンゴがいっぱいの地という意味らしい。カザフスタンは現在の栽培リンゴの発祥地と言われていて、シルクロードを通して東西に広がったという説がある。現代のリンゴの原種は今でもアルマトイ近辺の原始林にあるようだ。

朝食のビュフェでお腹いっぱい食べたあと、早速迎えに来てくれたバスに合流した。今回予約したのは一泊2日間のツアーで、アルマトイ市内から220キロ離れたチャリンキャニオンをはじめ、コルサイ湖（Озеро Кольсай）とカインディ湖（Озеро Каинды）などかなり長距離の移動が必要な場所まで送ってもらえ、ゲルでの一泊を含む金額も予想以上にお手頃価格（約4万5000円ぐらい）だった。やっぱり初めての国なので、移動の大変さを考慮すると一人旅よりツアーの方が便利で無難。同じバスに乗っているツアー参加者は20人ぐらいで、そのうち15人がインドからの観光客だった。カザフスタンは地理的にインドから遠くなく、広大な自然と異国文化を体験できるという点を考えると魅力的な旅行先かもしれない。他の五人はオランダ、ドイツ、アメリカから来た若者バックパッカー。

バスを乗って早速チャリンキャニオンへ。窓際の席なので外の景色を眺めたら、最初の町の景色から徐々に建物の数が少なくなり、地平線の果てにそびえ立つ山々が連なる雄大な天山山脈とその前に広がる一面の草原になった

チャリンキャニオンは、アメリカのグランドキャニオンに遜色のないほど雄大な峡谷の景色だと言われているので旅行前のリサーチで既にたくさんの写真を見たが、実際訪れてその自然の雄大さに感動した。全長は200ｋｍあるらしいが、今回は入口から2キロぐらい歩いたチャリン川までの徒歩コース。崖に囲まれたチャリン川の川辺で写真を撮りながら、昔のシルクロードのキャラバン隊もこのように、川辺で休憩を取っていたじゃないかと妄想を馳せた。

もう写真いっぱい撮れたと満足したところ、バスが宿泊のゲルのある村に向かう途中、草原一面に黄色の花が咲いている地域に突入した。花が密集している所に止まり、草原のど真ん中にある場所でみんな写真を撮り始めた。遠くに山頂が雪をかぶった山々が連なる天山山脈、目の前に黄金のように輝いている花畑（野生なので畑と言えるだろうか）。ここはまさにインスタ映えの最高のスポットじゃないかと、心の中の興奮を隠せず、携帯を取り出して写真を撮りまくった。本当に映える写真を狙うなら、カザフスタンに来るべきだなと、再びここの美しさが日本であまり知られていないことに残念に思った。

宿泊地にあるゲルで泊るということで、最初はテント泊と同じように本当に寝る場所だけかと思ったら、中身にベッドもコンセントもあり想像以上で快適だったので、時差があるにも関わらず、その日は早く寝ることができた。

遠いロシア再訪（続）

浜野 道博

ロシアの民芸品の一つに「パレフ（塗）」がある。漆器の表面に精巧な細密画をほどこした文字通りの玉手箱である。読者のなかにも大切に持っておられるかたがいるだろう。パレフ塗の工房や職人はモスクワから300km東にあるイワノボ州パレフ市に集中している。

晴天に恵まれた2024年9月5日モスクワ東駅を出発し2時間40分ほどで州都イワノボの一つ手前Shuya駅に到着、迎えてくれた車でさらに30kmロシアの平原を移動してパレフ市に着いた。

住民5000人足らずのこじんまりした町並みだが、足を一歩踏み入れるとずしりと重い文化に気づく。イワノボ州政府が運営する国立パレフ美術館のイコン・コレクションはパレフ塗に先行したイコン画家の息づきを何百年たった今に伝え、素晴らしい。市内の聖十字架掲揚教会のイコノスタス（聖障）は圧巻であった。

パレフ工房とその技術はソ連崩壊後職人たちによって守られ民営化された。パレフ塗は今日プライベートビジネスの世界で作られ売買されている。パレフ塗は他の民芸品にくらべ職人にひときわ高度の技量が求められ、その分単価も高い。かつては外国人観光客の懐を当てにしていたものだが、海外からの観光客が激減した今はロシア国内の需要が旺盛で、注文に追い付けず、若い職人の育成が課題であるという。

マトリョーシカなどロシアの民芸品はどれも売行き不振で後継者難で困っているときいていたので、堅調なパレフは意外であった。そういえば、パレフ市に至る道筋もパレフ市内も整然と舗装され、ゴミ一つ落ちておらず清潔であった。町中の植栽は手入れが行き届いており住民の落ち着きが感じられた。家屋は新築も多く十分な修理が施され、ふとドイツの農村にいる錯覚すら覚えた。

豊かなのはモスクワだけ、モスクワから一歩出ると家屋は傾き、道路は穴ぼこだらけと言った風景は過去のものになりつつあるのだろう。

パレフ塗の歴史はマトリョーシカ同様100年そこそこである。開国から明治維新にかけて大量の和漆器がヨーロッパにもたらされ、ドイツからその一部がモスクワ近郊のFedoskinoに至り、パレフのイコン画家が和漆器に関心を寄せたことに始まるという。パレフ塗の職人組合は1912年に結成され、1925年にソ連社会での継承が確かなものになり今日に至っている。マトリョーシカと並んでロシアの優れた民芸品のルーツに日本がたたずんでいるという快い発見の旅であった。

ジャガイモの季節到来

キタヤマ　忍

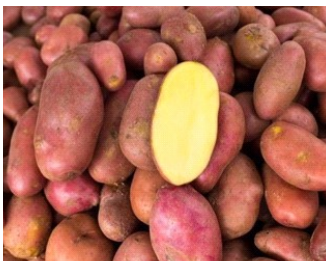
さて、今年も北方圏にジャガイモの美味しい季節がやってきました。国内外品種を含め日本のジャガイモは約100品種、ロシアは約280品種（2010年）もあり、その国土の広さと多様な環境そして需要を感じます。今回はロシアで人気のジャガイモをいくつかご紹介します。

(1)

・アドレッタ（ドイツ系）
全土で栽培できるので家庭菜園・農家共に定番の品種。ほのかに甘くて香りが良く煮崩れしやすいのでピューレやサラダ向きです（1）。

・レッド・スカーレット（オランダ系）

(2)



炒めものにぴったりの定番赤品種です。ロシア中央・南部で栽培。「風と共に去りぬ」のヒロインに因んだネーミング（2）。

・カラレーバ・アンナ（ドイツ系）
艶やかな皮とホクホクの食感。新じゃがの皮付きフライドポテトがオススメ。ベラルーシのルカシェンコ大統領が栽培している。

・ネフスキー（ロシア系）
とにかく強い品種で中央アジアでも一般的。メークインに似たねっとりとした口当たりで煮崩れしにくくオリビエサラダにぴったり。長期保存は石鹸の味!?になるので向かない。

(3)

・アメジスト（ロシア系）
美容と健康に良い成分が豊富。美しい紫色は熱で変色せず、彩り豊かな煮物や炒め物、菓子などに人気（3）。

・バロン「男爵」（ロシア系）
日本のそれと同名異種。ウラル地方で誕生し、極東など寒冷地の栽培に適している。黄色くホクホク系、軽い口当たりと土のような風味が美味（4）。

(4)

（ビデオグラファー）

床屋談義

畔上 明

幾十年に亘っての常客となっていた理髪店では、暫らく振りに訪れたりすると「また出張にいらしていたのですか？」「ええ、ロシアに長いこと滞在しておりまして、その間モスクワやサンクト・ペテルブルクで散髪しておりました」と答えたものでした。

そして「ロシア人と比べると私の髪の毛は太くて硬いから、鋏の傷みが激しくて倍の料金をもらわなければ割に合わないなどと冗談を言われたりするのですよ」といった話や「洗髪するときはかなり手荒で乱暴なくらいでしたよ」といった他愛ないエピソードを頭の片隅に入れておいてくれたようで、それ以降ヘアカットに訪れれば話題をロシアに向けるサービス精神が発揮されるのです。

「またロシア美人に会いに行ってきたのですか？」「何をおっしゃいますか、あくまで仕事で多忙な日々でしたよ」「プーチンをどう思いますか」と答えに窮するような政治問題を投げかけてきたりします。「床屋をやっていますが本を読んだりしてみるとプーチンの言うことにも一理あるようにも思えてきたのですが」等と言われているうちに、2年半前に戦争が始まってからというものの、お互いどうなのでしょうねと首をかしげ合うのでした。ウクライナ侵攻ニュースに対する絶望感に陥っていたため、人殺しという戦争が一刻も早く終結することを祈るばかりであることを語り、加藤周一の言葉「どんな人間でも悪魔ではないのだから私は死刑に反対し、戦争はどんな人間でも悪魔にするのだから、私は戦争に反対する」を思い起こしていることを伝えたりしました。

ところで、若い頃から海外に渡れば、時間が許す限りその土地の床屋さんに立寄る習慣がついてしまっておりました。ハノーファー、ライプツィッヒ、フランクフルト、コペンハーゲン、ヘルシンキ、ブダペスト、キーウ(キエフ)、タシケント、エレヴァン、そしてソウル、台北、シンガポール、大連…。

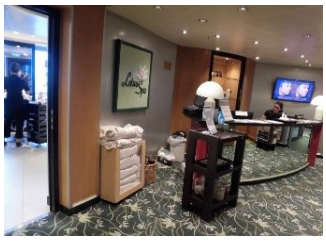
エストニアのタリンでは同じ店に数年を経て訪れた時には私のことを記憶に留めていてくれ、感激したものでした。

大学時代の恩師との話の中、その土地その土地の生活の一端に触れるということで同様の経験をされたと伺い嬉しい共感を覚えたものです。

ロシアでは、大都会の他、地方都市のチェリャービンスク、ウラジヴォストーク、カザンでの理髪店、ヴォルガ川下りのモスクワからヤロスラヴリの船上散髪店での思い出があります。

クルーズ船と言えば「飛鳥」や「にっぽん丸」の船内にて、又ウラジヴォストークからの「飛鳥２」、さらにコルサコフからの「ダイヤモンド・プリンセス」号ではジンバブエ出身のビューティ・ガパラさんにヘアカットしてもらったことが記憶に新しいところです。

地元の散髪店では近頃は店員さんの方からロシアの話題を提供してくれます。「バッパー翔太という旅する青年が発信するYouTubeをご存知？ロシアの樹海でトナカイと住む民族との生活が面白かった」などと聞かされ、モンゴルからロシアへの道中に出会ったトゥバ人を紹介する貴重な映像の存在、そんな私個人ではなかなか知り得ない新たな側面からの情報を得たりもするのでした。



2017年9月20日「ダイヤモンド･プリンセス」船内ヘアサロンでのジンバブエ出身、南アフリカで美容師修業したビューティ・ガパラさん

ウズベキスタン2回目の訪問

千葉 麻里

2024年春、4月1日から9日まで昨年に引き続きウズベキスタンを訪問。今回は、日本センターのあるタシケントとブハラを訪れた。

タシケントでは日本センターで茶道、生け花を、翌日の「平山郁夫国際文化キャラバンサライ」では風呂敷、友禅、きものの順で講習会を実施。センターの新向井さんには昨年同様、新任の川元さんと共にまた準備などですっかりお世話になった。また、岩崎所長は生け花のクラスにも参加して盛り上げてくださった。そして、「キャラバンサライ」では、ファルーフ館長に挨拶していただいた。

キャラバンサライの庭にある桜の下で

昨年と違うのは生け花のマスタークラスがあり、大使館や通商代表部で指導してくださっている松村先生のお弟子さんが参加してくれたことだ。ルーマニアからのフロレンティーナは天使のような笑顔でご主人と着物で大活躍。モスクワから来たオクサーナは日本語堪能、日本文化に詳しい才女で、通訳としても活躍。生け花では松村先生と共に、二人とも見事なデモンストレーションを披露した。

今年ウズベキスタンに移住して茶道の先生となられたクズミノフ絵理子先生には茶道だけでなく、きもののマスタークラスでも着付けなど細かいところまでテキパキと動いていただき、すっかりお世話になった。ターニャさんがしっかり守って来た様々な道具たちが、これから絵理子先生によって更に生きると思うと嬉しい。

また、友禅では笠原先生の生徒さんの小貫さんが初参加し、手足となってよく働いてくれた。

4月5日には列車でブハラへ移動し、大学でゆかたと友禅の講習会を行った。日本センターのマフムドフ氏は日本語も達者だった。ここのホテル、オリエントスターは珍しく風呂付きで快適。会議室も完備しているのに、日本のビジネスマンにはまだ知られていないようだ。

帰りは空路、タシケントへ戻り、昨年同様、日本語の生徒たちラヒモフ一家に車2台で寺院や市場など案内してもらったりすっかりご馳走になってしまった。色々な方々に助けられて、今年も無事に役目を果たして帰国することができた。